

論文 Article

**建設学科における大規模クラスの英語授業に
マルチメディア・ベースド・ティーチング手法を
改善導入した効果に関するアクション・リサーチ**

原稿受付 2014年3月25日

ものづくり大学紀要 第5号 (2014) 19~23

金美紀

ものづくり大学 技能工学学部 建設学科 非常勤講師

An action research study into the effects of improving multimedia-based teaching approaches to a large class in an English language teaching context at Dept. of Building Technologists

Miki KON

Part-time Lecturer, Dept. of Building Technologists, Institute of Technologists

Abstract

In Department of Building Technologists, there are over 100 students in an English class. As extensive researches into teaching large classes in higher education have been reported in the last few decades¹⁾, various problems exist in actual conditions in a large class. This study tries to solve the problems by improving multimedia-based teaching using well-equipped facilities in the lecture room, and investigates into students perspectives for multimedia-based learning in the large class. The collected questionnaires show that the students basically approve multimedia-based learning, and the conclusion suggests strategies for improving the quality of teaching in a large class at a Japanese university by utilizing multimedia.

Key Words : action research, a large class, multimedia-based teaching

1. はじめに

一般的に英語教育における大規模クラスとは、受講者が40名から150名のクラスを定義する。本学建設学科の英語講義は常時受講生が100名以上のため大規模クラスに該当する。マルチ・ベースド・ティーチング手法は、ビデオ、スライドからインターネットを活用した大規模な学習システムまで定義が広範囲であり、日本の高等教育機関においては約30%の大半が活用している²⁾。本研究は、本学建設学科の英語講義における平成24年度までの授業観察とクラス・アンケートの検証と内省を踏まえた平成25年度の授業改善実践報

告であり、マルチメディア・ベースド・ティーチング手法による講義を受講した履修者の学習意識改善、学習効果に関して、平成25年度第4Qに受講生全員に実施したクラス・アンケートをもとに報告を行うものである。

2. 建設学科の英語講義

建設学科の英語講義は基本的に1年生を対象とし、第2Qから第4Qまで毎週水曜日の3、4限目に開講している。平成25年度第4Qの履修登録数は129名(平成25年10月29日)で2年生~4年生や製造学科の学生も含まれていた。期末試験

(平成 26 年 1 月 29 日) 受験者数は 107 名。クラスのレベル分けはなく、講師は日本人講師 1 名である。授業内容はシラバスに基づき、(1)洋画・洋楽で学ぶ英語表現、(2) 文法学習、(3) 文法復習課題、(4) Phonics、(5) 日常会話リスニング練習、(6) TOEIC Bridge(R)演習、(7)日常英会話表現演習を、90 分間授業、10 分間の休憩時間を挟んで 2 コマ継続して実施している。教科書は、文法復習として東旺出版「新自習英作文ノート」、リスニング演習としてマクミラン・ランゲージハウス「Making Friends 1」を使用しており、レッスン内では個人、ペア、グループで各課題を行う。グループ課題は正解数順に毎回順位を発表して順位を競う事により協力して学習する環境を作っている。毎回学習した内容確認をプリントで提出し出席確認としている。

3. アクション・リサーチとは

アクション・リサーチの定義は「授業内におけるさまざまな問題を解決するために、教師自らが中心となって、その授業に関するデータを収集・分析し、その問題の解決策を導き出していく研究方法」³⁾である。授業に関する客観的な内省を深める為に、量的データと質的データを活用し検証を行う。授業改善の手順としては、現状把握→目標設定→計画→実践→検証と内省を行い³⁾、改善後に現状把握からの過程を繰り返して行く。本研究は、平成 24 年度までの授業観察とクラス・アンケートの検証及び内省を踏まえた平成 25 年度の授業改善に関するアクション・リサーチを行い、平成 26 年度の授業改善に繋げるという長期的な展望の元に実施されている。

4. 大規模クラス

一般に大規模クラスには次のような特徴が見られる。不利な点としては、クラス秩序統制を保つ事や学生全員に効果的な学習教材、指導内容の選定が難しく、講師による個別の学生の認識も薄くなりがちである⁴⁾。対照的に有利な点は、相互的

なやりとりに十分な数の学生が常に存在し、変化に富んだ人間的資源が豊富で、相互学習の機会が充実しており、講師への刺激が多いため専門技術の向上が余儀なくされることである⁵⁾。

5. アクション・リサーチ内容

5.1 テーマ

建設学科の英語講義において、シラバスを基に、マルチメディア・ベースド・ティーチング手法を改善し大規模クラスの特徴を活かした講義内容を構築することで、より学生に受け入れられやすく、動機づけができる講義を行う。特に、大規模クラスに必要な環境づくりとして、楽しくリラックスした雰囲気、講師からの明確でわかりやすい指示、適切なユーモア、学力向上の実感、刺激を与え励みになるチュートリアルが必要である⁶⁾。平成 25 年度第 4 Q の期末に受講生全員にクラス・アンケートをとり、検証の材料とする。

5.2 現状把握と目標

平成 24 年度までの検証により例年講義開始時には一般的に以下のような問題点が見られる。①学生の英語力に大きな幅があり教科書通りのティーチングでは落ちこぼれが生じる。②主に 1 年生 3 クラスで構成されており、2～4 年生もいるため教室内にクラスや学年ごとの見えない壁ができていく。③講義室が広くホワイトボードが見えにくいまたは講師の指示が伝わりにくい席がある。④英語学習への動機づけが薄いと受講態度に問題が生じ良好なクラス環境作りに支障をきたす。目標としては、平成 25 年度第 2 Q から第 4 Q の講義を通じて、入学時に保持している学生の英語力を総合的に向上させるために、マルチメディア・ベースド・ティーチング手法の改善導入により、第 2 Q 開始時のクラスに見られる問題点を解決する。

5.3 仮説

上記問題点を克服するための具体的な仮説は以下の通りである。①文法説明や発音練習など、スライドなどを活用して視覚的にもわかりやすく、英語が苦手な学生でも理解するようにすれば全員がわかる授業になる。②洋画や洋楽などを使用し

た楽しめる課題を行いクラス全体で学習経験を共有することで一体感が生まれる。③課題の指示などもスライドを活用し、全員が「今何をやっているのか」わかるようにする。④英語の重要性や世界の現状に関する情報を提供することで英語学習のモチベーションを上げる。以上の仮説に基づいて授業改善を試みた。

5.4 結果の検証

平成26年1月29日に授業に関するアンケートを実施し107名から回答を得た。量的データとして質問項目と結果をAppendix-1に掲載する。質的データとしては、クラス・オブザベーションと、アンケートの各項目に回答の理由を記入してもらい、検証材料とした。以下に、各仮説に関する学生の意見を集約する。仮説①：全体的にスライドでの文法説明や発音練習がわかりやすく、「英語が好きになった」「正しい発音が身に付いた」など効果が感じられる意見が多かった。仮説②：知っている洋楽、洋画は興味を持ちやすく、グループ課題も協力してできた。特にコメディや歌詞の和訳が面白いという意見が多く、例としては、英国のビデオ「ミスター・ビーン」を見て動詞や名詞を書き出す課題は学習内容が印象に残るといった意見が複数見られた。仮説③：スライドによる課題の指示はわかりやすいが、口頭による指示は後方に着席している学生には伝わりにくい。仮説④：外国への興味喚起、英語の重要性やTOEIC(R)テストについて認識ができた。例としては、YouTubeの「マット・ハーディング」が世界各地でダンスをするビデオを見て地名を英語表記で書き出す課題には海外への興味を示す意見が多数あり、第3、4Qではインターンシップに参加したいという声も複数聞こえた。反面、日本に居る限り英語は必要ではないという意見も根強く見られた。その他の注目点としては、受講前に比べて英語に関する意識が高まったと感じている学生が79%いるにも関わらず、英語力が変わらないまたは下がったと感じる学生が38%いる。回答理由から、講義内容が中学高校の復習を重要視しており、もともと英語力の高い学生にはTOEIC Bridge(R)以外は簡単すぎるとの見方もある。また、洋楽、洋画など各マルチメディアの導入には全体的に効果的だった

との反響が多い中、会話演習はあまり効果が感じられていない。会話演習に積極的ではない学生が多いため、さらに動機づけやより明確な誘導方法が必要である。質問以外にも自由記入欄を設け、学生の観点から授業内容を振り返ってもらったが「友だちができた」「建設用語を学習したい」「全体的にうるさい」「グループワークに非協力的な学生がいる」「授業時間が長くて疲れる」など、クラス・マネジメントや講義内容に関する意見が多かった。次年度におけるクラス・マネジメントに関するアクション・リサーチの必要性を実感した。

6. まとめ

アンケート結果から分かるように、マルチメディア・ベースド・ティーチングは、概ね学生に好評であり、大学における大規模クラスに必要とされる環境づくりに効果的なことが改めて判明した。まず、全体的に楽しくリラックスした雰囲気は音楽、歌、ビデオ、会話などから作り出す事ができる。次に講師からの明確な指示はスライドを併用して視覚的にも補うとよりわかりやすい。また、適切なユーモア、笑いと共に学習することで理解、定着を深めることができる。学生からは「楽しいものは記憶に残る」という意見が多かった。進歩しているという実感を与えるには、各発音時の口の形や舌の位置を表したスライドを使用した発音演習や、画像を活用し視覚的にも理解を促す文法説明が効果的である。英語の重要性や、自分の将来について考えてもらうためには、刺激を与え励みになるチュートリアルが不可欠であるが、世界各地を紹介するビデオや世界的な規模の建築のプロモーションビデオなどが学生にとって興味深く受け止められた。今後の留意点としては、なによりもまず使用する教材の適切な選択が重要であり、同時に、伝統的なティーチング手法をないがしろにしてはならない⁷⁾。本学の特徴でもある座学と演習の融合を図り、それにより学習内容の定着を行うとともに、充実したシラバスに忠実に講義を行うことが重要である。これは、マルチメディアに頼りすぎず、基本に忠実な講義を行うためであ

る。また、大規模クラスでは1名の講師が多数の学生を対象とするため人間的なコミュニケーションが希薄になりがちである。講師はマイクrophonを通した講師対全体の発話のみならず、出来る限り直接に学生とコミュニケーションをとり、調和的な関係すなわち「ラポール」を築き上げる事が重要である⁸⁾。最後に、これまで授業評価に関するアクション・リサーチは小・中・高校で主に実践されているが、指導の理論と実践の現場でのギャップをなくすためにも、田中が指摘するように⁹⁾大学でももっと実践されるべき効果的な研究手法であると言える。今後も本学の建設学科に適した内容の充実した講義が行えるよう授業改善を継続したい。

文 献

- 1) Teaching and Educational Development Institute, (2001) Teaching and assessment in large classes, Teaching Large Classes, The University of Queensland, Australia.
- 2) Takeda, K., (2009) Foreign Language Education at University in Japan, Language and Culture, Bunkyo University, Vol.22, p132-150.
- 3) 三上明洋, ワークシートを利用した実践アクション・リサーチ, 大修館書店, 2010.
- 4) Dewan, S. (2008) Teaching large multilevel classes, Journal of NELTA, Journal of NELTA, Nepal English Language Teachers' Association, Vol8, No. 1-2, December 2008, pp.158-162.
- 5) Agheshteh, H. A. (2008) Teaching in the large multi-level classes, English Language Teaching Conference – Iran 2008, Teaching English Language and Literature Society of Iran.
- 6) Waugh, G. H. and Waugh, R. F. (1999) The Value of Lectures in Teacher Education: The group perspective, Australian Journal of Teacher Education, Volume 24, Issue 1, p.35-51.
- 7) Xu, Z. (2001) Problems and strategies of teaching English in large classes in the People's Republic of China, Proceeding of Teaching and Learning Forum 2001, Murdoch University.
- 8) Wang, Q. and Zhang N. (2011) Teaching large classes in China – English as a foreign language, International Association of Teachers of English as a Foreign Language 2011 Brighton Conference Selections.
- 9) 田中誠, 授業改善のためのアクション・リサーチ, 長崎国際大学論叢第7巻, p.105-113.(2007)

Appendix-1 アンケート内容と結果

- Q1. 建設学科の英語講義を受ける前に比べて、英語の重要性に関する意識は：
高まった 79% 変わらない 21% 低くなった 0%
- Q2. 建設学科の英語講義を受ける前に比べて、自分の英語力は：
上がった 63% 変わらない 35% 下がった 3%
- Q3. スライドを使った発音の練習は：
効果的だった 66% まあまあだった 33% 効果がなかった 0%
- Q4. スライドと英作文ノートを使った文法学習は：
わかりやすかった 65% まあまあだった 32% わかりにくかった 2%
- Q5. Mr. Bean や Matt Harding などのビデオによる学習は：
効果的だった 74% まあまあだった 21% 効果がなかった 6%
- Q6. 洋楽の歌詞を使った学習は：
効果的だった 74% まあまあだった 21% 効果がなかった 5%
- Q7. Making Friends 1 を使ったリスニングと会話練習は：
効果的だった 40% まあまあだった 50% 効果がなかった 10%
- Q8. TOEIC Bridge (R) を使ったビジネス英語学習は：
効果的だった 55% まあまあだった 29% 効果がなかった 17%

Q9. QA-100 を使って講義室内を歩きたくさんのクラスメイトと会話する練習は :

効果的だった 33% まあまあだった 28% 効果的がなかった 39%

Q10. 毎回出席確認プリントを使用してそのクラスの内容確認, 復習を行うことは :

効果的だった 81% まあまあだった 19% 効果がなかった 0%

Q11. ネイティブスピーカーが文法などを説明するビデオは, 前と比べて :

わかるようになった 57% 変わらない 40% わからなくなった 3%

Q12. 今後の英語学習については :

続ける 64% わからない 38% 続けない 3%

Q13. 将来的な英語資格取得については :

取得したい 26% わからない 71% 取得しない 10%

Q14. 将来的な留学やインターンシップについては :

考えている 17% まだわからない 60% 考えていない 30%
